世界20カ国で話題!!

週刊ダイヤモンド
4月9日号
綴じ込み
付録

【試読版】

希望をはこぶ人

絶望の淵にいた僕の目の前に、スーツケースを手にしたひとりの老人が現れた。
不安、焦り、悲嘆、疑念……心に根を張った絶望感から
僕を、そして町の住人たちを救った老人の言葉とは――。

**ホームレスからベストセラー作家になった作者による、
幸運を切り開くための物語。**

アンディ・アンドルーズ【著】
弓場隆【訳】

四六判上製／240ページ
本体予価1300円

2011年4月14日配本（予定）

目次

第1章 絶望と希望
家も家族も希望も失くした青年のもとに、ジョーンズと名乗る老人が現れる。

第2章 離婚の危機
別れを決意しかけた一組の夫婦。ふたりを救った老人の助言とは？

第3章 愛情の表現
ジョーンズと再会を果たした若者は、四つの愛情表現を教わる。

第4章 不安と感謝
心配性の中年男性に対し、老人は不安をとりのぞく秘訣を授ける。

第5章 恋愛と結婚
老人と語らう三人の若者。自分にふさわしいパートナーの見つけ方を学ぶ。

第6章 老いと使命
生きる望みを失った老婦は、ジョーンズの言葉に勇気と希望をとり戻す。

第7章 傲慢と改心
独善的な態度をとる経営者は、老人のある言葉をきっかけに心を入れ替える。

第8章 懺悔と許し
心を一新した経営者は、良き上司、良き夫になるための心構えを諭される。

第9章 若者の未来
絶望の淵にある青年に、ジョーンズは成功の秘訣を教える。

第10章 希望という名の贈り物
ある日忽然と消えた老人。残されたスーツケースには一通の手紙が…。

人生で立ち止まったとき、ひらいてほしい物語。

あなたはいま、どのような毎日を送っていますか？　自分の人生をどのように考え、だれを想い、何に迷っているのでしょうか。

日々の生活を過ごすなかで、私たちはときにつまずき、「こんなはずじゃなかった」「どうすればいいのかわからない」「あのころに戻ってやり直したい」などと悩みます。生きることとは、そうした苦難を乗り越える力を試されつづけることなのかもしれません。

†

四月十四日にダイヤモンド社より刊行される『希望をはこぶ人』（原題：*The Noticer*）は、二〇〇九年にアメリカで刊行されるや、またたく間に世界二十カ国で翻訳が決まった話題作です。

物語の舞台はアラバマ州オレンジビーチ。著者アンディ・アンドルーズ自身の経験が随所に織り込まれた半自伝的小説というスタイルをとる本作には、さまざまな悩みを抱えた人たちが登場します。身寄りを失って自暴自棄になる若者。気持ちのすれ違いから離婚の危機を迎えた夫婦。仕事もプライベートもうまくいかず、自分はなぜ幸せになれないのだろうと肩を落とすビジネスマン。最愛の息子に先立たれ、もはや生きる気力すらなくした老婦。他人を信じず、ただひたすら傲慢にふるまう事業家……。

そんな彼らのもとに、ジョーンズと名乗る老人が現れます。「歌のうまい人や足の速い人がいるように、私は人が見落としていることに気づくのが得意なんだ」と語るその老人は、悩みを抱える登場人物たちの心に、「物の見方」という人生の知恵をさずけていきます。

†

ここにお届けする試読版は、『希望をはこぶ人』の中から第4章と第7章の二章分を抜粋したものです。ジョーンズという名の老人が登場人物たちに、そして私たちに語ってくれる言葉に耳を傾けながら、少しのあいだ、あなた自身の生き方について想いをめぐらせてみてください。

傲慢と改心

ヘンリー・ウォーレンは夜半過ぎに車でアトランタを出発し、ガルフコーストに向かった。カーラジオもCDもかけずに車を飛ばし、モンゴメリーを通過して、あたりが寝静まっている午前五時前にミネット湾のひとつ目のインターチェンジから幹線五十九号線に入って南に進み、さらに海岸沿いへと向かっていた。

ヘンリーは三十二歳で、すでに結婚していた。妻は最初の子どもを妊娠していたが、最近はほとんど顔を合わせていない。二人はアトランタ郊外のバックヘッドに住んでいた。その家を維持するだけでもきつかったのに、海岸沿いに分譲マンションを購入していた。

経済的にはけっして余裕があるとは言えない。自分では広い視野に立って物事を見て仕事に精を出しているつもりだったが、どこか行き詰まりを感じることもあった。だが、いつもそんなことはすぐに忘れて仕事に取り組んだ。

おれは究極の事業家だ――ヘンリーはそう自負していた。アトランタに広告会社を設立し、五人の従業員を雇っている。海岸では造園業を営んでおり、仕事の規模に応じて三人から七人で構成されるふたつのクルーの運営をしている。車は賃貸契約のシボレー・タホ。この二年間、ほとんどいつもこのSUVをアトランタと海岸の往復に使い、走行距離はすでに一〇万キロに達している。

ヘンリーは居眠り運転をしないように窓を開け、五十九号線沿いを一時間ほど南へ進んだところで湾の行き止まりまで来た。そこを右折してウエストビーチ通りを走っていると、朝日が地平線上に昇るのがルームミラーに映った。

運転席の時計を見ると、もう六時十分だ。自宅に戻る時間はないが、このあたりで何分か休憩をとる余裕くらいならある。最近競り落とした分譲マンションの新築の打ち合わせをクルーとするのは、それからでも間に合うだろう。駐車場に車を停めてエンジンを切ると、ヘンリーは眠りに落ちていった。

ヘンリーの仕事ぶりはいかさまだらけだった。とりあえず着工し、平日に現場を視察して作業がいくらかでも進んでいることを客に示す。クレームがあれば適当に言い訳をしてごまかし、絶対に守れないとわかっている約束をまた重ねる……。

工事が終わると代金を全額受け取るのだが、この頃になると客もうんざりしているため、ヘンリーと縁が切れてむしろせいせいしていた。だが、ヘンリー自身はそんなことは意に介していなかった。この近辺なら客はいくらでも見つかるから、仕事にあぶれることはない。広い視野に立って物事を見ているから大丈夫だ――そう高をくくっていたのだ。

彼の言う「広い視野」とは、できるだけ多くの客と契約を交わすことである。そのためなら、初めから無理とわかっている期日を約束することもいとわなかったし、報告とは異なる安物の資材を使い、実際にはまともに取り組むつもりのないまっとうな仕事を約束することにもためらいはなかった。

その一方で、作業員たちに対しては「充分な仕事ができていない」と理屈をこね、賃金をよくピンハネしていた。どうせ彼らは不法就労者だから、文句があっても当局に異議申し立てはできないという読みがあったのだ。

ヘンリーはまたしても悪夢にうなされて目を覚ました。実際、このところ悪夢ばかり見ていたが、彼はそれを睡眠不足のせいにした。

手元の時計はもうすぐ午前八時になろうとしている。それを見たヘンリーは、あわてて車から飛び出した。作業員たちは一時間前に仕事にとりかかっているはずだった。

駐車場を横切って歩いていくと、荷台にヤシの木を積んだまま停車している大型トレーラーが見えた。数人がシャベルを持って立ち、一人がエンジンを切ったままトラクターに乗っている。ヘンリーが大声でけしかけると、作業員たちは彼のほうを見た。

「こら、ぼやぼやするな！　早くヤシの木をトレーラーから降ろせ！　ボサッと突っ立ってるだけで給料をもらうつもりか！　二人はここに残って、ほかのヤツらは印をしたところに穴を掘れ！」

怒鳴られた作業員たちは仕事に取りかかった。小一時間ほどでトレーラーからヤシの木を降ろし終わると、十一人の作業員はそれぞれの持ち場に戻り、

びくつきながら必死で作業をした。
作業員たちを叱りつける一方で、ヘンリーは携帯電話にかかってきた別件の客からのクレームを処理した。途中、妻からの着信にも気づいたが、これだけは応じないままやりすごした。今、おれは忙しいんだ、それくらいあいつもわかってるだろう――。
作業現場に掘られた灌漑用の溝を見たヘンリーは、作業員を怒鳴りつけた。
「おい、そんなに深く溝を掘るな。時間の無駄だ。後で適当に砂をかぶせて隠しておけばいい。深さは四〇センチもいらん。一〇センチ程度で充分だ」
するとそのとき、背後からヘンリーを呼びとめる声が聞こえた。
「もしもし」
「なんだ」ヘンリーは振り向きもせずに答えた。
「溝を深く掘って埋めておかないと、雨や風にさらされて一カ月もしないうちに表面に出てしまうよ。それでもいいのかい?」
「かまうもんか。どうせ一カ月後にはおれたちはここにいないんだ」
「たしかにそうだが」とその声は言った。「溝が表面に出ると、みんながそれを目にするよ。そうなると君の評判が――」
そんな生意気な口をきくのはどこの誰だ?
「いったいおまえは誰に向かって――」
怒りにまかせて振り返ったヘンリーは、そう言いかけたまま、驚きのあまり体を凍りつかせた。
目の前に老人が立っていたからだ。老人の瞳は、吸い込まれそうなほど青かった。その瞳に見つめられたヘンリーは、一瞬身動きがとれなくなって気を失いかけた。が、なんとか平静さを取り戻し、その老人に尋ねた。
「おれの下で働いてる者か?」
「ずっと前からね」老人はほほ笑みながら答えた。
見たこともない老人にそう言われて、妙な気分になった。とはいえ、この老人に見覚えがあるような気もする。怒りはすっと収まったが、代わりにひどく混乱してきた。
「名前は?」
「ジョーンズだよ。君は自分をウォーレンさんと呼んでほしいのだろうが、今日のところは親しみをこめてヘンリーと呼ばせてもらっていいかな?」
ヘンリーは無言でうなずきながら軽いめまいを覚えた。何なのだろう、この老人の不思議な存在感は……。ヘンリーは老人の顔と声に全神経を集中した。
「木陰に行こう」
老人はそう言うと、近くの大きな樫の木の下へと移動した。「君にちょっと訊きたいことがあってね」
ヘンリーは気が進まなかったが、黙って老人にしたがった。
「さあ、ここに座って。水を持ってこようか?」
地面に腰を下ろし、首を横に振る。
老人はまるで霧の中から現れたかのようで、ヘンリーの脳裏にはさまざまな思いが浮かんでは消えた。――ああ疲れた。この老人について来ちまったが、いったい何をするつもりだろう。このおれに何の話があるっていうんだ?
「若者よ」
ジョーンズは脇に置いたスーツケースに腰掛けて足を組み、ヘンリーを真正面から見つめていた。
「悪い知らせを持ってきたんだ」とジョーンズは言い、身を乗り出してこう続けた。
「まもなく、君は死ぬ」
ヘンリーは恐ろしさのあまり身じろぎひとつできなかった。だが、心の中では必死で叫び声を上げていた。この老人のもとから一刻も早く立ち去らねば……! そして、やっとのことで声を絞り出した。
「ど、どういう意味だ?」
「人生なんてあっという間さ。風が吹き抜けるのと同じくらい、はかないものだよ。青々と生い茂っている葉が、すぐに枯れ果ててしまうようにね。
まもなく、君は死ぬ。葬儀が終わると、家族と友人が集まって食事をする。彼らは君にはとくに関心がなく、通り一遍のことしか言わない。なぜだかわかるかい? 人生は『モノポリー』みたいなものだからだよ。サイコロを振って土地を取引し、不動産を独占するゲームさ。うまくいけば、多くのホテルを所有できるかもしれない。しかし、最後はすべて箱の中に片づけ、次の人が君のものを奪い合うことになるんだ」
若者よ――ジョーンズは続けた。

「君は何度も『広い視野』という言葉を使っていたね。今度は私が言わせてもらうよ。君は広い視野に立って物事を見ているつもりかもしれないが、それは、君を絶望的な人生に駆り立てているだけだ。満身創痍の、真っ暗闇の人生にね」

その言葉を聞くうちに、ヘンリーは心の中の霧が晴れていくのを感じた。目は老人に釘づけになったまま、その言葉を聞き、一つひとつを理解しようとしていた。

「さっき、あんたはおれがまもなく死ぬと言ったが……」とヘンリーは慎重に切り出した。

「君の注意を引きつけようとしただけさ。しかし、人生に関する興味深い物の見方だと思わないかい？　これはあらゆる人にあてはまる普遍の真理だよ。もちろん君にもね」

ジョーンズはそう言って、まわりにいる人たちを指し示した。

「彼らもみんな、まもなく死ぬ。これがもしドッグイヤーだったら、大半の人がすでに死んでいる計算になるよ」

「いったい何の話だ？　どうもよくわからん」

「そうだろうね」ジョーンズは優しい笑みを浮かべて言った。「では、はっきりさせよう」

老人は一瞬押し黙ると、再び口を開いた。

「『小さなことにこだわるな』という教えを聞いたことがあるかい？」

「ああ、あるよ」

「そうか。私は君に『小さなことにこだわれ』と言うためにここに来たんだ。なぜだかわかるかい？　人生全体を形づくっているのは、小さなことだからだよ。

君のような考えの人はたくさんいるが、そういう物の見方は歪んでいる。なぜなら、広い視野に立って物事を見ると言っておきながら、それが小さなことから成り立っていることを理解せず、小さなことをないがしろにしているからだよ。わかるかい？」

ジョーンズは一息つき、言葉を継いだ。

「何年か前のことだがね、一匹のリスがニューヨークの地下鉄の電線によじ登ったために電圧異常が起き、金具がゆるんで電線が垂れ下がり、電車がそれをひっかけて走行して電線を切ってしまった。その結果、四万七千人の通勤客がその晩マンハッタンで何時間も足止めを食う羽目になったんだ。この大事故は元をただせば、たった一匹の小さなリスのしわざだったんだよ」

ジョーンズはさらに話を続けた。

「ハッブル宇宙望遠鏡を覚えてるかい？　一九四六年に考案され、総製作費は二十五億ドルにのぼるという代物だ。ところがこの望遠鏡を打ち上げた後で、ＮＡＳＡは一枚のレンズが当初の設計よりわずか〇・〇〇二ミリ歪んでいることに気づいた。最終的には宇宙飛行士たちが修理したわけだが、この『小さなこと』のために史上最も高価な望遠鏡がしばらく普通の望遠鏡と同じ程度の性能になり下がってしまったんだ」

ジョーンズは、ヘンリーがじっと聞いていることを確認してさらに言葉を継いだ。

「つまり、大きなことは小さなことから起こるのだから、小さなことをゆるがせにしてはいけないということだよ。君は成功しようと躍起になるあまり、本当の成功から遠ざかっているのが現状だ。――君は『成功』と聞いて、まず何を思い浮かべるかね？」

「そうだな……。大きな家、かっこいい車、バカンス、高級腕時計、豪華なヨット、それに――」

「じゃあ今度は」ジョーンズはヘンリーの答えをさえぎって言った。「『成功者の生き方』というと、何を思い浮かべるかね？」

ヘンリーは即答を避けたが、ややあって、動揺した面持ちでこう答えた。

「妻と、これから生まれてくる子ども。男の子なんだ」

ジョーンズはうなずいた。

「知ってるよ。――それから？」

「家族との時間。親友。僕が影響を与えた人たち」

「よい影響かね？」とジョーンズが問うと、ヘンリーの表情が曇った。「どうやら、君はまわりの人たちによくない影響を与えているようだね」

「たぶん」ヘンリーは恥ずかしそうに認めた。

「たぶんじゃない。多くの若者と同じように、君は崖っぷちにいる。しかし、目隠しをはずしさえすればその状況は避けられる。経済面でも精神面でも、君は人生のあらゆる面で成功を追い求めているように見えて、その実、破局

に向かって突き進んでいるのが現状だ。今のところ、君のことを気にかけているのは二人しかいない。一人は私。もう一人は奥さんだが、君は奥さんの話を聞こうとしないね。電話にすら出ようとしないじゃないか」

ヘンリーは険しい表情でジョーンズを見た。「どうしてそれを？」

「図星だろ」とジョーンズは言ったが、返事がないので作業員たちのほうを見た。

「彼らの名前を知ってるかい？」

ヘンリーは首を横に振った。するとジョーンズは、照りつける日差しの中でひざをついて灌漑作業をしている三人を指さした。

「ウォルター、ラモン、ファニータだよ。ウォルターにはもう孫がいる。息子のウィリアムは技術者で、妻と二人の子どもがいる。息子家族はデトロイトに住んでいたが、ウィリアムは一年前に失業し、その直後に子どもの一人が病気になったんだ。今は息子家族もウォルターたちと一緒に住んでいる」

ジョーンズは手をかざして作業現場を見渡し、ヤシの木を植える穴を掘っている若者を指さした。

「あそこにいるのがウィリアムだ。彼も君の下で働いている。ラモンとファニータには子どもはいないが、ゆくゆくは子どもがほしいと思っている。二人とも君たち夫婦と同い年だよ。ファニータは四日前の土曜日に流産した。君は月曜の朝にラモンに何て言ったか覚えてるかい？」

「彼の奥さんの件については何も聞かされていなかったものだから……」

「ファニータが午後に仕事に来なければ、二人ともクビにすると言ったんだよ」

ジョーンズはしばらくヘンリーと目を合わせ、再びまわりを見渡した。

「注水管の作業をしている少年はマーティンだ」

ジョーンズは少年のほうを見て言った。

「彼はまだ十六歳で、これが初めての仕事だ。父親は町の不動産の半数を所有する名士でね。ひと夏、息子にアルバイトを通じて自立することを覚えてほしいと思っているんだ。父親が手広く経営する事業の中からどれか選んで働いてもよかったんだが、マーティンはここを選んだ。

マーティンは、君の下で働いていることについて父親に相談したが、父親には『簡単にあきらめずにもう少し頑張ってみろ』と言われている。おそらく父親は、君を反面教師として息子に学ばせようとしてるんだろう。将来、マーティンは多くの従業員を率いることになるからね。君がマーティンを殴ったりしないかぎり、父親は息子をこのままここで働かせるつもりだよ。しかし……」

ヘンリーはちらっと老人の顔を見た。

「君は、マーティンの家族とかかわっている人たちにはよく思われないだろうね。仕事の紹介もしてもらえそうにない。それから――」

ジョーンズは別の方向を見て言った。

「あそこで溝を掘っているやせぎすの男はフレッドだ。現在五十歳で、複数の仕事を掛け持ちしながら母親とアパートで暮らしている。どう見ても善人だが、将来に対する希望が持てずにいる。希望なんて、とっくの昔になくしてしまったんだ。たしかにフレッドは仕事に精いっぱい打ち込んでいるとは言えないかもしれない。それでなのかい、先週、彼の給料から五十ドルを差っ引いたのは？」

ジョーンズはうつむいているヘンリーの顔をのぞきこんで目を合わせようとした。

「彼の仕事ぶりに見合う分を渡しただけだよ」ヘンリーは小声で言った。

「なるほど、それも一理ある」

ジョーンズはそう言ったが、次の瞬間、険しい表情になった。

「じゃあ、君はどうなんだ？　君も自分の仕事ぶりに見合うものがほしいかい？」

ジョーンズはその質問を投げかけたまま黙っていたが、少したってため息をつき、首を振りながら言った。

「私なら非情な仕打ちはご免だな。裁きよりも情けがほしいからね」

ジョーンズはさらに話を続けた。

「ウォルター、ウィリアム、ラモン、ファニータ……それ以外の人たちも、彼らをつくりたもうた神にとっては大切な存在なんだよ。ちょうど、これから生まれる君の息子が君にとって大切な存在であるようにね」

しばらく二人は黙って座っていた。ヘンリー・ウォーレンは人生の岐路に立たされていた。ジョーンズは、これまで何人もの人にそうしてきたように、ヘンリーが決意するのをじっと待った。

ジョーンズは知っていた。生き方を変えるという決意は、派手なパフォーマンスを伴うことはめったにない。多くの場合、涙と後悔を伴う。そして、許しの力が心の溝を埋め、明日への希望と目的意識を与え、人生を新しい方向へと推し進めるのだ。

「おれの人生はめちゃくちゃだ」ヘンリーは静かに言った。

「そのようだな。しかし、それもこの瞬間までだ」

ヘンリーは顔を上げた。

「どういう意味だい？」

「今この瞬間、君は変わることができるという意味だよ。仕事のやり方、家族への接し方、君に頼りながら生計を立てている人たちへの接し方を変えることができる。今すぐにね」

ジョーンズはヘンリーの瞳をのぞき込んだ。

「人が変わるのには時間がかかるんじゃないかと思われがちだが、そんなことはない。変わることはすぐにできる。変わろうと決意するまでには時間がかかるかもしれないが、変わることは一瞬でできるよ」

「よし、それならおれは変わる」ヘンリーは言った。

「つまりおれ……いえ、僕は、もう変わりました」

「わかっていると思うが、君が変わったからといって、君の評判も変わるにはしばらく時間がかかるかもしれないよ」

ヘンリーはうなずいた。

「しばらくはまわりの人も、君を見る目を変えていいものかどうか迷うだろうね。しかし、君が心を入れ替えたという証拠を示せば、いずれ君への態度を改めてくれるよ」

ジョーンズは言葉を継いだ。

「ちょっと尋ねたいことがある。君が完全に心を入れ替えるには、この質問に対する答えを理解しておく必要があるんだ。準備はいいかな？」

「はい」ヘンリーは用心深く答えた。

「五羽のカモメが防波堤にとまっている。そのうちの一羽が飛び立つことを決意した。残っているのは何羽だい？」

「四羽です」

「そうじゃない。五羽だよ。飛び立とうと決意することと、実際に飛び立つことはまったく別物だからね」

ジョーンズは説明した。

「いいかい？　誤解されがちだが、決意そのものには何の力もないよ。そのカモメは飛び立つことを決意したが、翼を広げて空を舞うまでは防波堤にとまったままだ。残りのカモメとどこも違わない。人間だって同じだよ。何かをしようと決意した人と、そんなこと考えてもいない人とでは何の違いもないんだ。

ところが人は、他人のことは行動で判断するのに、自分のことは決意で判断することがよくある。しかし、行動を伴わない決意は、期待してくれている人に対する裏切りでしかない。たとえば、『花を贈ろうと決めていたのに、実際には贈らなかった』『期日どおりに仕事を終えるつもりだったけれど、間に合わなかった』『誕生日にお祝いに行こうと思っていたが、結局行かなかった』という具合にね」

「わかりました。では……僕はまず何をすればいいのですか？」

「もし君が変わったというのなら、その証拠を見せることだよ」

ジョーンズは笑みを浮かべながら、ヘンリーのベルトにぶら下がっている携帯ホルダーを指さした。

「まず、奥さんに電話するんだ。後のことはそのときに考えればいいから」

ヘンリーは携帯電話を取り出し、ジョーンズを見ながら尋ねた。

「今すぐ……ですか？」

「そう、今すぐだ」ジョーンズは立ち上がりながら言った。

ヘンリーは電話番号をダイヤルし、妻が出るのを待った。電話越しに妻の声が聞こえたとき、彼は一気に思いのたけを打ち明けた。

「もしもし、あの……今まで迷惑をかけてすまなかったね。僕は心を入れ替える。これからは状況がよくなっていくよ。何を言っているのか訳がわからないって？　家に帰ったらくわしく話すけど、ある男性と出会ってね。君もその人と話すといい。ちょっと待って――」

だがヘンリーが顔を上げると、老人はもうそこにはいなかった。

（第7章より抜粋）

不安と感謝

ウォーカー・マイルズが公園内の道を使うことはめったになかった。その日の夕方も、もし海岸沿いの道の信号が赤でなかったなら、この道を通ることはけっしてなかっただろう。そこの赤信号が長いのを知っていたウォーカーは、信号待ちを避けるために右折して公園内に入ったのだった。

急カーブでハンドルを切りながら、ウォーカーは自分の人生について考えていた。

職業は製薬会社の営業マン。五十三歳になるが、四カ月前に二度目の離婚をして独身に戻ったばかりだった。最近、海岸沿いのこの町に引っ越してきたのは、以前休暇でここを訪れた際の楽しい記憶が残っていたからだ。

幸せになるきっかけがほしい――それがウォーカーのささやかな望みだった。彼にとって幸せとは、つかもうとするたびに指の間からするりとこぼれ落ちる代物だ。頭の中はいつも不安でいっぱいだった。何か問題が起きるんじゃないか、間違いをしでかすんじゃないか……。仕事でもプライベートでも思い悩み、最近では自殺すら考えるありさまだ。

最初の妻は、彼の悲観的な性格に愛想を尽かした。二番目の妻は、別れ際に悲しそうな表情を浮かべながら、こう言い残して出ていった。

「うまくいかないことがあっても、それで人生が終わるわけじゃないのよ。いつかあなたが、それに気づいてくれることを願っているわ」

だが、ウォーカーは今夜もすっかり落ち込み、かなりくたびれていた。

ウォーカーの運転する車が公園の池に架かるひとつ目の橋にさしかかったとき、ヘッドライトに照らされて、道路から数メートル離れたところに誰かが座っているのが見えた。

浮浪者、ろくでなし、老いぼれ。

その人影が視界の端をかすめた瞬間にウォーカーの脳裏をよぎった思いは、けっして好意的なものではない。車の速度を落とす気はなく、ましてや停車するつもりなどさらさらなかった。だが、その直後にウォーカーはこうつぶやくことになる――おいおい、僕はいったい何をしてるんだ？

老人らしきその人影を認めたウォーカーは、道路の真ん中でブレーキを踏んだ。ため息をついて首を振ると、ルームミラーを頼りにゆっくりとバックしながら、「僕もばかだな」とつぶやいた。

老人の近くまで車を寄せると、助手席側の窓を開けて、用心しながら薄暗い周囲をのぞきこんだ。

「やあ」

声の先には、片手を上げてあいさつをする老人の姿があった。

「あのう、大丈夫ですか？」

ウォーカーの問いかけには答えずに腰を上げると、老人は足元のスーツケースを手にして車に近づいてきた。

それを見たウォーカーは、とっさに助手席の窓を閉めかけた。この不気味な状況から早く逃げろと、全身の細胞が警告している。ところがどういうわけか、ウォーカーの体は凍りついたように動かなかった。

老人はウォーカーの車の横に立って言った。

「すまないが、今、何か言ったかい？　最近どうも耳が遠くなって、よく聞こえなかったんだ」

「ええ、まあ……」

暗がりの中で、老人の白髪と青い目が浮き上がって見えた。

「大丈夫ですか？　助けが必要かなと思いまして」

「やれやれ」と老人はつぶやき、こう続けた。

「人は誰でも助けを必要としている。助けを必要としていない人なんていやしないよ」

「あの、お言葉ですが――」

「おっと、そこまで！」

そして「若者よ、乗せてもらうよ」と言ったかと思うと、ウォーカーが抗議するより早く助手席のドアを開け、スーツケースごと車に乗り込んできた。

あまりに急な展開で、ウォーカーはこの侵入者に「降りろ」と言うべきか、それとも自分が降りるべきかとっさに判断がつかなかった。

それにしてもおかしいな、ドアはロックしておいたはずなのに……。

ウォーカーが口を開きかけると、招かれざる客は手でそれを制し、「私の名はジョーンズだよ」と短く言った。「さんづけはいらないからね」

そして、目の前に座っている若者に初めて気づいたというように目を見開いて言った。

「たしかウォーカー・マイルズ君だね。気づかなかったよ」

「あのう……どこかでお会いしましたっけ?」

「いや、そういうわけじゃない。一週間前にスレク先生の診療所で君を見かけたのさ。そこで君の名前が呼ばれるのを聞いたものでね。君は私を覚えてないだろうが、私は人の顔と名前を忘れないんだ」

ウォーカーはまだ警戒していた。たしかに仕事柄、スレク医師の診療所も含めてこの地域の医療機関をくまなく回っているが、そこにいる患者のことなどいちいち覚えていない。この老人も病気なのだろうか?

「どこかお加減が悪いんですか?」

ジョーンズはまばたきをした。

「えっ、私が? とりあえず、フォーリーまで車で行こうか。君もそこに向かっているんだろう?」

ウォーカーは足元のブレーキをゆるめると同時に手でルームライトを消しながら、助手席に座っている奇妙な老人をしげしげと眺めた。

「ええ、そうですけど」

アクセルを踏み込むと、徐々に車の速度が上がった。

「指定の場所があれば、そこまでお送りしますよ」

「いいや、今夜は指定の場所を指定しない」

ジョーンズは自分の言ったダジャレに笑ったが、ウォーカーがにこりともしないのを見て話題を変えた。

「いつだったか、とある街にいたときのことだがね――たしかシカゴだったな。ひとりの男が、風に吹き飛ばされた誰かの帽子を追いかけて道に飛び出したんだ。結局、男は車にひかれて死んでしまったよ」

ウォーカーは嫌な顔をし、老人をちらりと見て言った。

「どうして僕にそんな話をするんです?」

「びっくりすると思ってね」

ジョーンズは前方を見つめたままそう言った。

「人は無意味なものを追いかけて、すべてを失ってしまうこともあるということだよ」

一瞬、沈黙が流れた。車のヘッドライトは公園内を走るアスファルトと周囲の木々を明るく照らし出していた。ウォーカーは運転に集中しているふりをしていたが、胸の内には遠い日の記憶がよみがえっていた。ハンドルを握る手に力が入る。そしてついに、ため息とともにこう漏らした。

「それはまさに僕です」

ジョーンズは上体を運転席のほうへ向けながら言った。

「なに、誰しもそういう時期があるものさ。でも、どうしてそれが自分だと思ったんだい?」

ウォーカーは内心、あれこれと考えていた――僕は真面目な人間だ。なのに、こんな老人のために車を停めるなんてどうかしている。ましてや、今まで誰にも話したことのない事情をこの老人に打ち明けようとしているなんて……。

ウォーカーは話を切り出しつつも、自分ではない別の誰かが話しているような不思議な錯覚にとらわれていた。口を閉ざしているべきだと頭ではわかっているのに、それよりも強い何かが安心と信頼を抱かせた。ジョーンズといると、ずっと昔からの知り合いのような気がして、なぜか心が落ち着くのだ。

ウォーカーが語ったのは、子どもの頃の話だった。三人兄弟の末っ子として育ったこと、アルコール中毒の父に悩まされたこと。大人になってからのことも話した。二度の結婚と離婚を経験したこと。これという仕事に出合えず職を転々としていること。結婚生活でも仕事でも、しばらくの間はうまくいくのだが、どこか満たされずにやがて行き詰まってしまうこと……。ウォーカーは、知らぬ間に胸の内を洗いざらい打ち明けていた。

ウォーカーが語り尽くす頃には、二人は喫茶店でコーヒーを四杯もおかわりしていた。どうして僕はこんなところで老人と話し込んでいるんだろう、という思いが再び頭をもたげたが、昔なじみと久々の再会を果たしたような感慨に浸っていたこともたしかだった。

「父がアルコール中毒だったせいか、自分は駄目な人間だという思い込み

がどうしても抜けなくて」
「なるほどね。でももしかしたら、君が駄目な人間だから、お父さんはアルコール中毒になったのかもしれないよ」
ジョーンズは悪びれもせずにそう言って笑うと、相手のこぶしを牽制するかのように両手を前に突き出した。
「冗談だよ、冗談」
だがウォーカーは、それに対して怒っていいものかどうかわからなかった。
若者よ、とジョーンズが真顔で言った。
「お父さんの問題はすべて過ぎ去ったことだよ。お父さんはもう亡くなっているのに、君はまだ『父はアルコール中毒だった』と言って問題を引きずっている。過去にとらわれながら生きるのは、そろそろやめないとね」
「ええ、わかっています」
ウォーカーは目を閉じて言った。
「過去にとらわれてはいけない、思い悩んではいけない、落ち込むようなことは何もないって、理屈ではわかっているんです」
目を開けてジョーンズを見つめるウォーカーの表情には、長年のうちに積もりに積もったいらだちが表れていた。叫びだしたくなる衝動をこらえ、さらに続けた。
「でも、どうしてもその思いから逃れられなくて。そのせいで僕の人生は台無しです……」
そして、絞り出すように言った。
「もう、どうしていいかわかりません」
ジョーンズの手が伸びてきて、ウォーカーの手を優しく握りしめた。ささくれだった気持ちがすっと落ち着いてくる。ウォーカーは深呼吸をした。
「私の目を見てごらん」
言われたとおりにすると、ジョーンズは語りかけた。
「そう感じるからって、自暴自棄になることはない。事態は思っているほど深刻じゃないよ。わかるかい?」
ウォーカーがうなずくと、ジョーンズは少しほっとした表情を浮かべた。そして大きくひとつ息を吸い込むと、こう言った。
「いいかい、これから話すふたつのことを知っておくといい。まず、そんなに深く思い悩んでしまうのは、君がそれだけ聡明だという証拠さ」
ウォーカーはうつむき、椅子に深く腰かけた。その心中を見通しているかのように、ジョーンズの声が優しく降ってきた。
「お世辞で言ってるんじゃないよ。これは真実だからね。ただ、物の見方が少し異なるだけさ。君は理詰めで考えるタイプだね。しばらく私の話を聞いてくれるかい。なに、じきにわかるよ」
ジョーンズは穏やかな表情でコーヒーをすすり、再び話し始めた。
「くり返すが、君が深く思い悩んでしまうのは、それだけ頭がいいからだ」
そして内緒話をするかのように周囲を見渡すと、老人はこう付け加えた。
「頭の悪い連中は心配なんかしやしない。何も恐れてないんだからね」
混乱して、老人の言わんとすることが理解できない。ウォーカーが眉間にしわを寄せると、ジョーンズはさらに説明した。
「つまり、こういうことだよ。頭のいい人ほど想像力が豊かで、創造性に優れている。そうだろう?」
「まあ、そうですね……」
「不安とか恐怖というのは、想像力を間違った方向に使ってしまっている証拠だよ。頭がよくて創造性があると、起こりうることをすべて想像してしまう。こうなればああなるんじゃないか、ああなればこうなるんじゃないかってね。その結果、不安と恐怖にとらわれて身動きがとれなくなってしまうんだよ。わかるだろう?」
ウォーカーは小さく笑ってうなずいた。
「それはまさに僕です。頭がいいわけじゃありませんが……」
「謙遜しなくていいよ。頭の悪い連中は何についても心配しないから、怖いものなしさ。何でもできると思ってる連中はどうかしているよ」
「僕もそう思います」
「そうだとも」
二人は声を上げて笑った。
「君みたいに頭のいい人間は、いつも間違った想像力の使い方をしている。煙も上がってないのに『火事だ!』って叫ぶようなものさ」
「それが僕の悩みの種でして……。どうすればこの悪い癖を直せるでしょうか? 理屈ではわかっていても、心配せずにいられないんです」

「理屈でおかしいとわかっているなら、それを打ち消すいちばん簡単な方法も、やっぱり理詰めでいくことだ」
「どういうことですか？」
「さっき、君が知るべきことはふたつあると言ったね。ひとつは、思い悩むのはそれだけ頭がいい証拠だということ。そしてこれが第二の点だが、不安を打ち消すには理詰めで考える必要があるってことだよ」
ジョーンズはテーブルに両ひじをつき、ウォーカーをじっと見つめた。
「疑念と恐怖にとりつかれると、それが現実になるんじゃないかと無意識のうちに考えてしまうもんだ。『本当にそうなるかもしれない』とか『もしそうなったらどうしよう』という具合にね」
ジョーンズは少し身を乗り出した。
「そうなると、深刻な事態が差し迫っているような気がして無力感に襲われ、仕事が手につかなくなる。人間関係もおかしくなる。こうして想像力を悪い方向に使い、ついに自滅してしまうんだ。君にも思い当たるふしがあるだろう。
君のすべきことは、悪い理屈をよい理屈で打ち消すことと、悪いことが起こりそうだと無意識のうちに推測しないようにすることだ。その代わり、それが起こりうる確率を客観的に計算してみるんだ。そうすれば確率がかなり低いことがわかって、心配の種を減らすことができるよ。これを心配事に関する信頼すべき目安と考えるといい」
ジョーンズは通りがかったウェイトレスからペンを借りると、
「たとえば、君が抱えている心配事のうち――」
と言いながらテーブルの上の紙ナプキンを取り、「四〇パーセント」と書いた。そして顔を上げてウォーカーを見ると、こう続けた。
「四〇パーセントは、絶対に起こらない」
さらにその下に「三〇パーセント」と書き、
「次に、心配事のうちの三〇パーセントは、もう起こってしまったことだ。だから、それについてあれこれ悩んでも事態はもう変えられない。そうだね？」
「はい」
「それから、健康についての取り越し苦労なんていうのもあるな。これが全体の一二パーセントだ。『自分はがんになるんじゃないか』『頭痛がするのは脳に腫瘍があるからかもしれない』『おやじが心臓発作で他界したのは六十歳だった。おれももう五十九歳だから危ない』なんて具合にね」
「ええ、よくわかります」
「ほかにもあるな。他人にどう見られているか心配だというのが全体の一〇パーセント。でも、まわりの人がどう思っていようが、自分ではどうすることもできない」
「ということは――」
ウォーカーは頭を傾けて、逆さからナプキンを読みながら言った。
「残りは八パーセントということになりますね。これは？」
「それこそが正真正銘の心配事だ」
ジョーンズはそう言うと、さらに話を続けた。
「だが、その正真正銘の心配事にだって対処の仕方はある。そこを忘れてはいけないよ。多くの人は、起こりそうもないことや自分の力ではどうにもならないことにばかり気をとられてしまい、対処のしようがあることにまで手が回らないのが実情だ」
「僕のことですね」
「なに、もうそんなことはなくなるよ。ちょっと聞きたいんだが、朝起きて最初の十分間で、どんなことを考えるんだい？」
「やらなくてはいけないことです。『あそこに電話をかけないと』とか『あれを今すぐやらなくては』とか」
「それがその日の緊急課題というわけだね？」
「はい」
「なるほど。緊急課題について考えるのは当然だが、それ以外のことも考えたほうがいいね。枕元にノートとペンを置いて、起きぬけの十分間で、自分がありがたいなと思っていることを書き留めてごらん。人の名前でもいいし、物でも気持ちでも、何だってかまわない。暖かいベッドの中で眠れることや、帰る家があることも忘れちゃいけないよ。そのどちらにも恵まれずに夜を過ごしている人たちが大勢いるんだからね。君が朝食をとろうが抜こうが、食べたくても食べられない人が世の中にはたくさんいるんだよ。
若者よ。感謝しなければならないことを書き留めるときは、広い心を持っ

て創造力を働かせるんだ。毎日同じことを書いたってかまわない。大切なのは、それを実践することだ。考えるだけでは効果がないよ」

そしてジョーンズはにっこりとほほ笑んだ。

「もうわかったよね。君は自分の頭の中の想像と格闘してばかりで、何の効果も得ていないだろう」

ジョーンズはペンを置いて後ろにもたれた。二人の時間もそろそろ終わろうとしている。

「さあ心機一転だ。心配性の人はよく、『集中できないから仕事も人間関係もうまくいかない』と言うが、それは違う。心配性の人は集中してるんだよ。だってそうだろう、心配とは集中のことなんだからね。ただ、集中する対象が間違ってるんだ」

ジョーンズは続けた。

「君はもう確率を計算するすべを知っている。これからは自分がコントロールできることに集中するんだ。もう心配したり悲しんだりすることはない。君は感謝しながら生きていくのだからね。感謝の気持ちに満ちていれば、深く落ち込むことはないんだよ」

ジョーンズは店の奥を指さしながら言った。

「さあ、洗面所で顔を洗っておいで」

ウォーカーは立ち上がり、老人の肩にそっと手をやって言った。

「ありがとう、ジョーンズ。もし今夜めぐり合わなかったら、僕は……」

「さあ」

肩にかかったウォーカーの手に自分の手を重ねながら、ジョーンズは促した。

「行っておいで。わかってる、わかってるとも」

ウォーカーは二分とたたないうちに戻ってきたが、いつの間にか勘定の支払いが済まされたそのテーブルに、老人の姿はもうなかった。

（第4章より抜粋）

［著者］
アンディ・アンドルーズ（Andy Andrews）

アメリカの作家。一九五九年、アラバマ州生まれ。高校卒業後、両親を相次いで失ってホームレス生活を送っていたが、一人の老人との出会いをきっかけに自暴自棄な態度を改め、人生を前向きに切り開く。当初、コメディアンとして人気を博したのち、作家に転身。講演者としても評判を呼び、全米の企業や団体から依頼が殺到する。政財界の要人とも親交があり、ニューヨーク・タイムズ紙で「アメリカで最も影響力のある人物の一人」と賞賛される。ベストセラー作家としてテレビにもひんぱんに出演している。日本での訳書に『バタフライ・エフェクト世界を変える力』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）などがある。現在、アラバマ州オレンジビーチで妻子と暮らす。

［訳者］
弓場 隆（ゆみば・たかし）

翻訳家。主な訳書に『この人についていきたいと思わせる21の法則』（小社刊）、『成功をめざす人に知っておいてほしいこと』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）などがある。